

ロード・オブ・ウォー

2005(平成17)年12月18日鑑賞<三番街シネマ>

★★★★



製作・監督・脚本=アンドリュー・ニコル/出演=ニコラス・ケイジ/イーサン・ホーク/
ジャレッド・レト/イアン・ホルム/ブリジット・モイナハン (ギャガ・コミュニケーションズ
配給/2005年アメリカ映画/122分)

……「史上最強の武器商人」と呼ばれた男を主人公とした映画をつくる。そんなチャレンジは、いくら自由と民主主義の国アメリカでも難しいはず。まして、イラク戦争が開始した2003年3月の直前に製作が決定されたこの映画の資金集めが困難をきわめたのは当然。しかし、『華氏911』(04年)に続く問題提起映画にニコラス・ケイジが主役として登場し、それなりの興行収入を挙げているのはさすがアメリカ! 「日米同盟」は少し知っていても、東ヨーロッパやアフリカの情勢に疎い島国の田舎っぺの日本人こそ、こんな映画を観てその視野を広げなければ……。そして、国連のあるべき姿についても真面目に考えなければ……。

第4章

いろいろな勉強になります

巨大化する軍産複合体!

師走の時期ともなると、テレビ番組には総集編や特集がたくさん登場するが、その中には見どころいっぱいのもがある。NHKが12月18日の昼3:05から4:45まで放映した『なぜアメリカは戦うのか』と題したハイビジョン特集選はその1つ。

この日観たのは2回シリーズの前編だが、これは1950年代の東西冷戦の真っ只中を指導したアメリカのアイゼンハワー大統領が、大統領職を離れるにあたって警鐘を鳴らした「軍産複合体」の危険が、2003年3月以降のイラク戦争展開の中で如実に示されることになったことの検証だ。それを語るのには、アイゼンハワー大統領の孫娘や共和党の国会議員たち。そして軍産複合体形成の中心人物はブッ

シユ大統領を支えていたあのチェイニー副大統領だ。

今晚7時から、ニコラス・ケイジが主演するこの『ロード・オブ・ウォー』を観ようとしていたその日に、偶然予備知識としてこのテレビ番組を観ることができた。実にラッキー……！

『華氏911』か『ロード・オブ・ウォー』か……？

自由と民主主義に最大の価値を置くアメリカにおいては、時の権力者に対する批判も自由。しかしそうはいっても、現体制を本気で批判するのは、一部の国民やメディアから拍手喝采を浴びることはあっても、大変な労力を必要とするうえ、批判と反発を覚悟しなければならないもの。北朝鮮はもちろん中国でも、あまりにあからさまな権力批判・体制批判をすればエライことになるのは明らか。しかしアメリカでは……？

ベトナム戦争を終結に導いたのも、ある意味では「反戦の世論」と言えるかもしれないが、多くの国民の支持を受けて決行されたアフガン戦争（2001年10月）とそれに続くイラク戦争（2003年3月）についても、一部アメリカ国民からの批判は根強いものがあつた。

そんな批判を映画化した代表作がマイケル・ムーア監督の『華氏911』（04年）だったが、2005年9月に公開されたこの『ロード・オブ・ウォー』もそれに並ぶ代表作の1つ。

『華氏911』は風刺タップリ、皮肉タップリにブッシュ大統領を手厳しく批判する内容で、アメリカの民主主義の懐の深さにビックリさせられたものだったが、どうしてもドキュメント風であつたため、映画としては私にはもうひとつの感じだつた。それに比べるとこの『ロード・オブ・ウォー』は現実味タップリ。しかも主人公は架空の人物ながら、数名のモデルを参考にして映画用に創設された人物だから、もっとも現実にあつるような典型的な武器商人となつている。こりゃインパクトが強いのが当然だが……。

興味深い主人公の人間性

ニコラス・ケイジ演ずる、世界を股にかけた武器商人ユーリー・オルロフは、

ソビエト連邦崩壊前のウクライナに生まれた人物。アメリカ移住後も、のし上がるチャンスに恵まれないまま悶々とした生活を送っていた。しかし、ある日、あるきっかけから、武器の販売という「超すき間産業(?)」における自己の才能を発見した彼は、以降弟のヴィタリー(ジャレッド・レト)を「戦友」としてその事業を拡大していった。この映画の中でユーリーは「意志あれば、武器あり」を座右の銘とし、「自ら戦ってはならない」を商売の鉄則として大成功を収めていくが、ニコラス・ケイジはそんなユーリーの人物像の奥深くに入り込み、それを見事に表現している。

①「戦争犠牲者の9割が銃で殺されている。核兵器じゃない、AK47こそ真の大量破壊兵器だ」

②「私は殺し屋じゃない、人を撃ったこともない。戦争で稼いではいるが、人が死なずに済めばと願ってる」

③「武器売買に政治は無用、左右両派に売る。同胞を殺す銃さえ売るのが国際主義だ」

等の名セリフは、彼の本心から出たものだが、武器商人という「嫌な商売」を地獄に落ちることなくずっと続けられるというのは本当にビックリもので、その人間性は興味深いもの。

映画の冒頭、彼の口から直接語られる「今世界には5億5千丁の銃がある。ざっと15人に1丁の計算だ。残る課題は—“1人1丁の世界”というセリフは、本心、それとも……?

人間的葛藤 その1—両親・弟

もっとも、いくら自分の武器商人としての天性の才能に目覚め、華々しい活躍を続けているユーリーといえども、その人間的葛藤は物語の進行の過程でいくつか見えてくる。

その第1は、両親や弟との葛藤。大成功して金持ちになり、憧れの女性エヴァ(ブリジット・モイナハン)との結婚式に出席してもらったものの、ついには両親とは絶縁状態に……。

さらにウクライナ語で「戦友」としての誓いを交わした弟のヴィタリーもこの

「業界」に飛び込んだが、ユーリーにはその方面の天賦の才があったのに対し、ヴィタリーは全然ダメだったから大変……。麻薬に溺れたり、女に溺れたりという、ユーリーとは全く違う人間的な面を見せながら、ある時やっとまっとうな職場に復帰。

これで彼女と結婚して、将来自分たちの店を持つんだという小さな夢が実現するのかと思っていたら、再度大勝負に引っぱり込んだのがユーリー。その挙げ句、ユーリーと違い、より普通の人間的感性や人間味を持っていたヴィタリーの運命は……？

人間的葛藤 その2—妻・子供

ユーリーは若い頃からの理想の女性であったエヴァをあるきっかけでゲットすることになったが、それは彼の人生そのものと同じで、ウソで固めた演出によるもの。利口なエヴァはそのウソを承知しつつ、「家庭を守り、私を愛してくれるなら……」という条件付きで結婚を承諾した。

息子ニコライも生まれだし、約束どおり家庭や妻を大切に、息子を心から愛しているユーリーは、エヴァにとっても一部のウソを除いては理想的な亭主だったはず……。しかし、ユーリーの永遠のライバルともいえるインターポールの刑事ジャック・バレンタイン（イーサン・ホーク）の捜査に巻き込まれる中で、ユーリーの仕事に関心を持たざるをえなくなったエヴァが知った驚愕の事実とは……？ そして、それを知ってしまったエヴァがとった行動とは……？

映画の中では、それ以上詳しく描かれていないが、その行き着く先として想像できるものは……？

人間的葛藤 その3—彼自身の人間性

弁護士であり、民主党の代議士でもある西村眞悟氏の起訴・再逮捕のニュースや新聞記事が今踊っている。連日の取り調べに臨んでいる彼は、国会議員として引き続き活動していきたいとの意欲を示しているものの、さすがに憔悴感が強くなっていると報じられている。

そして、このユーリーも、ジャックによる長年にわたる捜査と何よりも決定的

な、ユーリーの正体を知ってしまったエヴァの捜査への協力によって、遂に逮捕されてしまうことに……。

映画のストーリー展開の流れからして、これでユーリーの武器商人としての活躍も遂に年貢の納め時がきたのかなと私は理解したし、ほとんどの観客もそう感じたはず。しかしそこで展開されるユーリーとジャックとの真剣勝負の行方は、その予想と全く正反対で、ユーリーは自分の釈放を予言するものだった……。さて、そのカラクリとは……？

そのものすごい実態にもビックリだが、そこまで強いユーリーの人間性にはただただビックリ……。

私も知らなかった武器商人の実態と取締法……

武器商人の必要性やその商売のやり方等については、抽象的には理解できるもの。しかし、①「商品」をどうやって運ぶのか、②代金の決済はどのようにするのか、③支払いの保証や担保はあるのか、④契約不履行の場合の法的措置は、など具体的な疑問点は多い。

そして、この映画を観ている限り、武器売買については法律や契約よりもカンや度胸、そして読みや経験が優先していると感じざるをえない。したがって、ユーリーがこの商売で才覚を発揮したのは、ホントにその方面での天性の才能があったからなのだろう。

その反面、私が弁護士として考えるような武器商人として守られるべき権利などというものは、どこにも存在しないといてもよさそうだ。

他方、パンフレットによれば、ユーリーを執拗に追うジャック刑事が所属しているインターポール（国際刑事警察機構）とは、世界各国の警察により結成される任意組織とのこと。

そして、「各国の武器輸出入規制法があるが、実は全ての国に適用される武器規制の有効な国際法は存在しない」とのことで、これは「国同士の政治的な思惑」がそれぞれあるためらしい。

したがって、「インターポールはこれらの武器拡散、密輸に対して限定的に力行使しているにすぎない」とのこと。

スクリーン上で再三ジャックが歯ざしりさせられる結末になるのは、決してジャックの能力不足のためではなく、取締法不備のためなのだ……。こりゃ、ユーリーは実にうまい「職域」に目をつけたもの……？

もっとも、自ら「リベリアの大統領」と称するアンドレ・バプティスト将軍の姿を見ていると、凶暴そのものだから、本来はあまり親しくなりたくない人物。しかしそう言っていたのでは、商談は成立しない。危険と隣り合わせの命がけの商売をやっているからこそ、莫大な利益を手にすることができるわけで、まさにユーリーがやっている武器商人という商売は、ハイリスク・ハイリターン商法の最たるもの……。

島国の田舎っぺ必見の映画だが……

日本は島国であるため、昔から対外的なことではあまり波風を立てず、ナアナア、まあまあという形でまとめるのが得意な国民。したがって対外的・国際的視点といっても、せいぜい、アメリカとの同盟関係と韓国・中国との関係を考える程度。その他は、ヨーロッパを含めて観光の対象地としては考えても、その政治・経済関係はもとより、軍事的関係まで考える人はマレなはず……。しかしそれは、日本が島国であり、日本国民が島国根性に満ちた田舎っぺであることを如実に示すもの。

それに対して、この映画の主人公ユーリーが示す行動は、世界を股にかけたものだし、当然紛争・戦争状態にあるヤバイ地域の国々がその活躍の舞台。すなわちそれはイラク、リビア、リベリア、ニカラグアそしてウクライナ等だが、これらは島国の田舎っぺである日本人にはもっとも関心が薄く、知識ゼロに近い世界だ。断片的に報じられるこれらの紛争の新聞記事を見ても、なかなか理解できないため、よけいにその距離感が遠くなるものだが、それではダメなことは明らか。そんな世界の紛争状況・戦争状況を知るためには、この映画は島国の田舎っぺ必見の映画……。

しかし残念ながら、日曜日の夕方7時からの上映にもかかわらず、観客はかなり少数。しかもそのほとんどは年配者ばかり。9・11総選挙で自民党に投票した多くの若者たちも、こういう映画を観てさらに考えなければ……。

最大の武器輸出国は……？

「最大の武器商人は合衆国大統領だ」というユーリーの言葉は妙に説得力があるが、この映画の最後にはそれ以上にショッキングな字幕が示される。それは今でも、最大の武器輸出国がアメリカ、イギリス、ロシア、フランス、中国であること。そしてこの5大国がいずれも国連安全保障理事会の常任理事国であり、拒否権を持っている国であるということだ。ソビエト連邦崩壊後、ソビエトが持っていた膨大な量の武器が紛争中の各地へ流されたことは私も新聞記事を読んでよく知っている事実。

また、アメリカから台湾へ「販売」されたキッド級駆逐艦2隻が、12月17日台湾海軍に正式配備され就役したとのニュースも12月18日の新聞各紙で報じられたばかり……。

70%という高投票率となったイラクでの国民投票が無事完了し、いよいよイラクからのイギリス軍やオランダ軍の撤退と日本の自衛隊の撤退が現実的なテーマとなっているにもかかわらず、世界各国での武器のニーズが絶えないという現実には何ら変化がないというわけだ。

武器商人であるユーリーが合法と非合法のストレスの線で活躍することができ、逮捕されてもその数日後になぜか簡単に(?)釈放されることになったのは、このような全世界的な規模での「武器輸出不可欠論」が存在しているからだとすれば、それは何とも恐ろしい話……。

そしてそうだとすれば、ユーリーの「今世界には5億5千丁の銃がある。ざっと15人に1丁の計算だ。残る課題は—“1人1丁の世界”」とのセリフも決してブラックユーモアではなく、実現可能で現実的な獲得目標ということになるのかも……？

2005(平成17)年12月19日記